



つながり、寄り添う

震災からだいぶ経ち、先日は南三陸鉄道全線開通のニュースがあったりして、少しずつ「復興」が進んでいるようだ。しかし、地元の方々にとって本当に必要とされているものが「復興」されているのかどうか、東京に住んで流されるように生活している者にとっては、伺い知れない部分も多い。

先週の現代文の授業で、現代の評論文では「切り離し」が批判され、「つながり」が求められるのが基本線であると話した。震災の際の「絆」も印象的だったが、震災をめぐる次のような文章に出会った。

*

三・一一から二年後、三陸海岸を周った。

「この二年は、まるでピエロが両手を広げてバランスを取りながら、必死で玉乗りをしている日々でした。いま、ようやく、平らな地面に降り立った気分なんです」。震災後、地元で子どものための図書館「にじのライブラリー」を開いた荒木そうこさんはいう。避難所では生きるのに精一杯で、仮設住宅に移っても、暮らしをととのえるのがやっとだった。「あの日何があったのか、自分は何をしたのか、みんなで話し合えるようになったのは、ようやく最近のことなんです」

あの日、陸前高田にかかる橋の上で、地元の駐在さんは必死で交通整理をした。ようやく車列が途切れると、押し寄せてくる海の壁に向かって両腕を広げ、「津波よ来〜い」と叫んで呑み込まれていった。両親を亡くし、親戚の家に引き取られた兄弟は、お彼岸になってお墓参りに戻ったが、家がないので墓前にテントを張って一夜を明かした。そんな話が、人々の口の端に、ぼつぼつとのぼるよう

になったのは、つい最近のことだ。思いっきり泣けば、どんなにさっぱりすることか。そう思っても、涙が出ない。泣けば、心の底が抜け落ちてしまいそうで、こわいのだ。

(中略)

大槌町では、自宅の斜面にひとりで石造りの図書館を建て、子どもたちに開放している佐々木格さんにお目にかかった。「人は自然に育てられ、共生していくしかない。命も財産も流され、被災地が知ったのはそのことだ。人生に大切なものは何か。豊かな自然のなかで子どもたちに考えてほしい」

佐々木さんの庭の中央には、白い電話ボックスが立っている。電話の線はどこにもつながっていない。大切な誰かを失った人が、受話器で話しかける「風の電話」だ。そのボックスの台に置かれたノートの冒頭に、こんな言葉が書かれていた。「お母さん、二か月がたって、今どこにいるの？」

二一世紀に入り、私たちはいつそう目先のことに夢中になり、刹那の変化を「永遠」と勘違いするようになった。失った人を悼み、寄り添い続けること。明日ではなく一年後、一年後ではなく一〇年後を構想すること。そのことの大切さを、被災地は教えてくれる。

深呼吸をして、自分にとって何が大切なのかを考えよう。ゆっくり、生きよう。

(外岡秀俊、『これからどうする』岩波書店、2013)

*

どうやって被災地と「つながり」「寄り添う」姿勢を持ち続けるのか。現在もなお我々につきつけられている課題である。